

船橋福祉相談協議会

ニュース

(講演会・シンポジウム報告)



第29号

発行者 特定非営利活動法人
船橋福祉相談協議会 ふらっと船橋(事務局)
273-0021 船橋市海神 1-31-31 ジュネス海神 101
Tel 047-495-6777 Fax 047-495-6776
HP <http://flat-funabashi.com>
E-mail flat-funabashi@key.ocn.ne.jp

「不安な幕開け」

特定非営利活動法人
船橋福祉相談協議会
理事長 宮代 隆治

皆様、明けましておめでと
うございます。通常なら、新
しい年を迎えられたことを皆
で喜び、家内安全、日々是好
日などを祈願の次第となりま
すが、今年は初日から何だか
雲行きが怪しい。
能登半島を中心とした地域を、

震度7の地震が襲いました。
元日の午後4時過ぎのこと
でした。その直後には、津波が押
し寄せました。建物は倒壊し、
押し潰され亡くなられた方、重
傷を負われた方も大勢居られ
ます。加えて火災が発生、多く
の家々が焼失してしまいまし
た。

当然住民の皆さんは避難所
に居を移されましたがライフ
ラインは止まり、食料や生活用
品類の物資は欠乏、折からの寒
さで皆さん、疲労困憊のご様子

です。中々スムーズには支援の
手が届かぬようで、災害関連死
も発生しています。

一年を通して地球規模の異
常気象のおかげで、干ばつであ
ったり大雨であったり、とにか
く私たちに災害をもたらす異
常な現象が日常化しています。
加えてこのような災害は、暮ら
しに多大なダメージを与え、
日々の営みに不安の影を落と
します。

さて、新年の干支は「辰」で
す。12子の中でも最も縁起
の良いものとされ、願いを叶え
物事を良い方向に導く力があ
る、とされているようです。安
心、安全な暮らし、その準備を
怠ることなく「辰」の背に乗
り運気を上げて行きたいもの
です。

また、昨年末には当法人主催
の講演会・シンポジウムを開催、
多くの人たちにご参加いただ
きありがとうございました。今
回のテーマは「皆、地域で暮ら

せてる？」としました。千葉県
は20年ほど前、それは初めて
「地域福祉支援計画」を作った
り、「第3次障害者計画」を作
ったりの時でしたが、これらの
計画を通じてこれから施行す
る地域福祉のイメージを、県民
が容易に理解できるような、フ
レーズを作りました。そして登
場したのが、「誰もが ありの
ままに その人らしく 地域
で暮らすことができる」でした。
障がいの世界で言えば、それま
での施策の主流であった「施
設入所」から「グループホー
ム」などを使った地域生活実
現への転換期でありました。以
後、国や自治体を挙げてより多
くの人たちの地域生活への移
行が勧められてきました。それ
は今日のグループホームの量
的拡大を見れば明らかです。し
かし、よくよく目を凝らして見
ると、地域で暮らすことに厳し
い現実と向き合わざるを得な
い人たちの存在も窺えます。例

えば、精神障害のある人たちはどうでしょう。世界でも類を見ない長期入院は解消されているでしょうか。行動障害という範疇で語られる障がいのある人はどうでしょう。日々、重篤な医療ケアを必要する人たちの場合は、昔、医療刑務所を見学したことがあります。そこには知的或いは精神に障がいのある人たちが収監されています。刑務期間が満期となり出所となりますが、地域に暮らす場所がありません。軽微な犯罪を起こし、再び収監される人たちが大勢いました。出たり、入ったりが繰り返されているようでした。

希望する人の誰もが地域で暮らせるようになる、方向性は定まったものの、それがどこまで現実のものとなっているのか、それを見極めたいことと、地域生活とは何なのか。単に、施設や病院以外に居を得ることをもって地域生活と言える

のか。"その人らしく"の延長線上には、満足や納得がなければなりません。理不尽な思いを抱えての生活ではいつか破綻を来すでしょう。

講演を洪澤茂氏にお願いしました。氏は中核地域生活支援センター(以下「中核」とする)

「長生ひなた」に勤務しています。この中核制度は、20年前に千葉県が独自に作ったものです。障がいの有無に関わらず、子どもから高齢者まで生活を送る上で分からないこと、困ったこと、悩んでいること、何でも相談して下さい。貴方の味方になり、一緒に解決に当たります。それも、365日24時間体制で。こんな役割や機能を有する機関になります。今回のテーマに沿った実践例もきつと心得ているのでは、この思いからの依頼でした。この他、4名のシンポジストにも登壇をお願いしました。各々の分野でご活躍の皆様です。ご発言の

詳細については、別稿をご覧ください。

会終了後のアンケートには、総じて講演やシンポジウムでのお話しに好評を頂戴したようで胸を撫で下ろしています。中核の視点を加えたことで、話題がより広がったように思えました。

昨年は国連障害者委員会から障害者権利条約に関する勧告などの指摘がこの国に示されました。そこには、精神科病院や児童成人問わず入所施設に対して、否グループホームまでそのあり様に厳しい注目が付けられました。この事は厳粛に受け止めたいと思います。

最後に私の脳裏に覚えたこと、「宛がいぶちの地域生活ではなく、私の望む地域生活を」でした。



「地域生活の実現に向けて」

船橋市健康福祉局

福祉サービス部

障害福祉課 課長補佐

川端 朝子

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いたします。

昨年12月の講演会・シンポジウム「皆、地域で暮らせる？」に参加させていただきました。第一部では講師の洪澤氏から、障害のある人の地域生活がどこまで実現しているか、この20年間における地域生活を支援する制度の変遷や、ご自身が支援者として関わってこられた事例と現状の課題についてお話があり、第二部では「私の望む生活を実現するために」というテーマのもと、4人のシンポジストそれぞれの立場からのお話がありました。中でも船橋市地域活動支援

センターのピアスタッフである松井氏の「自分の望む生活とは、他人と比べず自分なりの生活を求めること。」という言葉が印象的でした。障害のある人やそのご家族等がどんな暮らしを望んでいるのか、思いをしつかりと受け止め、それを実現できるような地域づくり、制度づくりをしていかなければ、と改めて痛感しました。

また、千葉市中央区障害者基幹相談支援センターの伊藤氏からは防災の取り組みについてのお話もありました。船橋市でも災害時における要配慮者の支援体制の整備に取り組んでいるところですが、元旦に発生した能登半島地震の被災地の状況を目の当たりにして、地域生活を安心して送るためには災害時の支援体制の整備は喫緊の課題であると再認識しました。

今後も関係機関の皆様のお力をお借りしながら、施策を進

めてまいりますので、一層のご理解とご協力をお願いいたします。



「障害のある人の地域生活

〜福祉のサービスで

どこまで実現しているか〜

千葉県中核地域生活支援
センター連絡協議会会長

渋沢 茂

ふらつと船橋の清水さん、宮代さんからお誘いをいただき、表記のテーマについてお話をさせていただきました。20年程前から振り返って、その頃に望んでいた、障害のある人

の地域生活はどこまで実現できているかを検証するものです。宮代さんは20年どころか30年ほど前から存じ上げていて、教えをいただいている恩師の一人です。清水さんは同年代の同志。お2人からのお誘いですので喜んで、昔を思い起こしながらとても楽しくお話をさせていただきました。

20年前と言えば、障害福祉の大変革の時期でした。2003年に障害者支援費制度が開始され、それまでの障害福祉の制度が大きく変わっていったからです。制度を利用するのは行政措置から利用者主体の契約に、実施主体は都道府県からより身近な市町村になりました。それまでの入所施設偏重の施策から、地域福祉への移行がされました。今では当たり前にあるホームヘルプ事業が当たり前に全国で使えるようになったのはこの時からです。日中活動を行うための通所施設

や、小規模な暮らしの場所であるグループホームはこの時から爆発的に数が増えていきました。皆が期待をしていました。何かが変わる、変えようと思っていました。

翌2004年には千葉県で中核地域生活支援センターが始まりました。制度からこぼれた方々の個別の相談に対応する他、地域づくりにも力を入れて取り組んできました。今日盛んに言われている、地域共生社会を千葉県で作りはじめたのです。

20年前のあの頃、僕たちは目の前にいる当事者の方や親御さんに沢山のことを教えていただきながら、次の時代を考えていました。県内の沢山の仲間と一緒に未来を創ろうとしていました。

社会的な資源は圧倒的に増え、携わる人が増えました。対象になる方も増えました。権利擁護やケアマネジメントの仕

組みが出来ました。それでもあの頃僕たちが目指していた「誰かが当たり前前に暮らすことが出来る社会」には至っていません。これからも皆さんと一緒に考え、行動しましょう。



「自分の望む生活」

船橋市地域活動支援センター
「オアシス」ピアスタッフ

松井 智雄

令和4年4月からピアスタッフとして「オアシス」に勤務しています。

自分なりの生活を求めるために必要なこと。

一つ目は「家族・職場・友達など周りの人たちが本人の障害を理解してくれること」だと思います。

家族について…自分の家族はなかなか障害を理解してくれませんでした。退院後、訪問看護の支援を受け、母親に同席してもらい、少しずつ症状（眠れないや抑うつ）を理解してもらえました。それまでは病気を抱えていることは理解してくれていましたが、最近症状があり、それをコントロールすることが難しいこととまで理解してくれていません。家族が障害を理解するには、発病から10年ほどかかった気がします。

職場について…職場は、自分が病気の症状で欠勤しても大丈夫、健常者が風邪を引く事と精神症状があり体調が悪い事を同じと考えてくれていきます。しかし、自分の知り合いは、職場は障害の理解が不十

分で、体調不良で休んだときにサボったと言われる、精神科の外来日を休みにする以外の配慮がないなどの話を聴きます。職場の理解が必要だと思います。

友達について…友達も自分が軽いうつ症状になったり、妙にテンションが高い躁症状っぽくなったりすることを理解してくれています。その友達との関係性があることが自分の強い支えになっています。

二つ目は「同じ病気を抱えている仲間に出会うこと」だと思います。

入院時の経験…入院中に出会った人とは、入院時の状況や立場などではなくただ入院生活の楽しみについて話しました。（病院食の献立や売店で何をかうか、今日のテレビの内容等）何気ない会話で気持ち前向きになっていき、入院は辛かったが、自分は一人ではないと思え、徐々に前向き

に未来を考えることが出来るようになりました。

デイケアでのこと…入院後自宅療養をしてからデイケア

（医療機関などで治療の一環として作業療法や精神科教育などを行う施設）に通所しました。そこで、自分の名前を覚えてくれる人が出来ました。その人と関係を築く様になり、当事者同士で発病期のことや症状のことなど自然と話し合い、自分一人が症状で苦しんでいるわけではないとわかりました。強い味方が出来たようで嬉しかったのを覚えていきます。仲間と出会うことの重要さがわかった自分の経験でした。

一般社会通念とは関係がなく他人と比べずに、症状や体調に合わせて生活する事や健常者と自分は違う部分があることを冷静に認めて生活していききたいと思えます。

「12月18日の研修会

に参加して」

社会福祉法人りべるたす

千葉市中央区障害者

基幹相談支援センター

伊藤 佳世子

この度、「皆、地域で暮らせているかい？」というお題をいただき、「少しはやってるよ」という気持ちで資料をつくりました。私は医療的ケアのある方の支援ということをテーマにお話をさせていただきましたが、終わってから、制度はできてまだまだ地域で暮らせていない現状を悩ましく思い返すこととなりました。

渋沢さんからは、これまでの実践の経緯についてお聞きしました。措置から契約へという時代の流れから、施設以外の暮らせる場所を地域につくって、もよいのではないかと考え、ヘルパー利用、グループホーム、

相談支援等よりよい形を求めて試行し、制度化してきた歴史を伺いました。「制度化は正しかったのだろうか？」という問いを、まさに今回投げかけられた思いでした。走り出した汽車の中にいる私たちは、もう戻れないところに来ていようように感じ、これから何を大事にしたらよいのかも一度考えねばと思った次第です。自分の発表が終わってから返す返す考えて、「制度で困ってきたこの数年、これでよかったのだろうか」という問いを持ちました。

もっと人と人が交流する温かい仕組みが欲しいのですが、制度ではむしろそれができず、再考したいと改めて思いました。そして、船橋市の関係者の皆さんと懇親会まで交流し、素晴らしいお仲間だなどおもいました。ありがとうございました。



「皆、地域で暮らせ

てる？」を合言葉に」

千葉県中核地域生活支援

センター

海匠ネットワーク

英 一馬

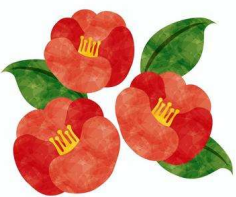
講演会・シンポジウムに参加させていただきありがとうございました。ありがとうございました。

現場にいますと、自分の仕事に「目の前の相談者のために役に立っているのか。」そして、「誰もがありのままにその人らしく、地域で暮らすことができる地域社会を実現するために役に立っているのか。」と、不安になることがあります。

今回、千葉県中核地域生活支援センター連絡協議会の渋沢会長のご講演を拝聴し、この20年間を振り返る機会を得たことに大変感謝しております。渋沢会長が示してくださった通り、制度や仕組みがほとんど

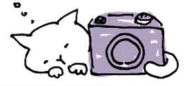
なかった20年前にくらべ、今では本当にいろいろな制度や仕組みが整ってきました。福祉に携わっている方々の意識もずいぶんと変わったことも再確認できました。私は、前に進めずにとその場に立ち止まっていたのではと感じていましたが、振り返るとずいぶん前に進んだことに気づくことができました。

とはいえ、これからも私たちの歩みは亀の歩み。本当に前に進んでいるのか分からないほどです。それでも、「皆、地域で暮らせてる？」を合言葉にこれからも一歩一歩前に進んでいきたいと思えます。そして、今後も制度や仕組みは整えられていくのだと思います。しかし、やっぱり人を支えるのは人であってほしいと改めて思うのです。



ご来場くださいました皆様ありがとうございました。次年度も講演会・シンポジウムの開催を予定しておりますので、是非ご参加ください。

講演会・シンポジウムのひとコマ



渋澤氏



川端氏



宮代理事長



伊藤氏



松井氏



住吉氏



英氏

